

## 質的研究を考える —概念、評価、方法—

住 政二郎  
流通科学大学

---

### 概要

本稿は、 Egbert, J., & Sanden, S. (2013). *Foundations of education research.* の内容と、 Mertens, D. M. (2014). *Research and evaluation in education and psychology* (4th ed). の中で質的研究について触れられている箇所をまとめたものである。Egbert and Sanden (2013) は、 2013 年度 第 3 回 LET 関西 メソドロジー研究部会 (以下、メソ研) にてご講演を頂いた高木先生が、主要文献として紹介されたものである (高木, 2014)。メソ研では、量的研究と質的研究共に、方法論に留まらず、各種研究手法の原理や認識論についても議論を深めてきた。本稿では、 Egbert and Sanden (2013) と Mertens (2014) の内容の他にも、メソ研でのこれまでの議論と学習内容を整理する意味も込めて著者自身の見解も述べた。意図的に直接引用を多めに行い、各文献のページ番号を付記した。関心のある読者は原著を是非手にとって頂きたい。

**Keywords:** 質的研究, Egbert & Sanden (2013) , Mertens (2014) , MAXQDA

---

### 1. はじめに

本稿は、 Egbert, J., & Sanden, S. (2013). *Foundations of education research.* の内容と、 Mertens, D. M. (2014). *Research and evaluation in education and psychology* (4th ed). の中で質的研究について触れられている箇所をまとめ、著者自身の見解を加えたものである。 Egbert and Sanden (2013) は、 2013 年度 第 3 回 LET 関西 メソドロジー研究部会 (以下、メソ研) にてご講演を頂いた高木先生が、ご発表の中で紹介された主要文献である (高木, 2014)。高木先生のご発表の内容は、外国语教育研究における質的研究の位置を整理し、質的研究の基盤を整備するために大変有意義なものであった。

Egbert and Sanden (2013) は、以下の 7 つの章で構成されている。

1. Foundations of Research: Conceptual Framework
2. Influences on the Research and the Researchers: Episte-what?
3. Research Paradigms

4. Research and Theory: just a Hunch or Something More?
5. Theoretical Frameworks: You Can't Have a How Without a Why
6. Research Methodologies and Methods: Ingredients for Research Success
7. Myths and Misconceptions About Research

本稿では、第 7 章を除く第 6 章までについてまとめた。第 1 章では研究者一人ひとりの価値観や思考の基底を成すものについて、第 2 章では世界の見方・見え方に関わる認識論について、第 3 章では研究デザインや研究手法の選択につながるパラダイムについて、第 4 章では理論について、第 5 章では理論枠組み（理論の事象への適応）について、第 6 章では研究手法とデータ収集・分析について書かれている。Egbert and Sanden (2013) は、以上の 6 つを統合して、木と葉のメタファーを使い、以下のように図示している。



図 1. 研究の概念図

Mertens (2014) については、Egbert and Sanden (2013) の内容と関連する第 1 章と第 8 章をまとめた。また、質的研究に関する 5 つの評価指標についても紹介する。第 4 版となった Mertens (2014) には、質的研究のセクションが加えられた。これは大きな変化である。Mertens (2014) は、方法論のみならず、具体的な研究事例を紹介し、研究を包括的に理解するために必要な認識論についても触れている良書である。

本稿では、Egbert and Sanden (2013) と Mertens (2014) の質的研究に関する箇所のまとめの他にも、質的研究を実際に行うことを想定し、Grounded Theory Approach (以下、GTA) についても簡単に触れている。また、2014 年 2 月に発表され、GTA などで言語データのコーディングを行うために便利な Mac 版の *MAXQDA II* の使い方についても簡単な概説を加えた。

## 2. Egbert and Sanden (2013)

Egbert and Sanden (2013) の目的は、量的研究および質的研究の双方に通じる共通理解を整備することである。冒頭には、以下のように書かれている。

... Joy Egbert and Sherry Sanden address central components of research in order to give both novice and experienced researchers **common ground** [emphasis added] from which to learn and grow. (p. ix)

Egbert and Sanden (2013) は大変分かりやすい英文で書かれている。また、多数の論文を巻末に掲載することで豊富な研究事例も紹介している。読者は、研究に関する理解を深め、具体例で確認することができる。研究手法や研究対象が複雑化する中で、研究のエンセンスを分かりやすくまとめた良書である。大学院生には是非手にとってもらいたい。

### 2.1 Conceptual Framework

第 1 章では、量的研究・質的研究を問わず、研究に関わるすべての営為の根底を成すものとして conceptual framework について書かれている。Egbert and Sanden (2013) は、これを絵画のキャンバスに例えて説明している (p. 5)。絵画は、テーマや対象を設定し、油絵であれば、油絵の具や溶剤を使って描かれる。絵画には多種多様な構図や色彩が使われるが、すべての絵はキャンバスの上で可能となる。つまり、絵に関わるすべての構成要素・行為を統合し、1 つの表現形態として存立させているのはキャンバスである。

同様のことは我々の日常生活でも観察可能であると本書は指摘する。我々は、特に意識することなく日常生活を行っているが、我々が日常的に食するもの、着るもの、好むもの、こうした生活全般のすべての構成要素・行為は、conceptual framework によって規定されている。この conceptual framework は、図 1 では土壌 (Ground) の部分にあたり、研究者一人ひとりの overall worldview ともいえる。<sup>1</sup> 本書では以下のように指摘されている。

We consider a conceptual framework as an **overall worldview** [emphasis in original]. It is an individual perspective defined not only by values and perceptions (Northcutt & McCoy, 2004), but also by the sum of one's experiences, beliefs, and knowledge from every facet of life, including, for example, gender, religious, family, political, social, academic, and environmental arenas. (p. 5)

## 2.2 Epistemology

第 2 章では、世界の見方・見え方に関する認識論 (epistemology) について書かれている。epistemology は、第 1 章の conceptual framework の上位概念にあたる。図 1 では根 (Roots) の部分にあたる。Egbert and Sanden (2013) は、研究者一人ひとりがこの世界または研究対象を見るレンズに認識論を例え、以下のように定義している。

...we define epistemology as **the individual lens, created through our worldview, that we use to understand knowledge in the world** [emphasis in original]. (p. 17)

上記の定義に続けて、本書には興味深い記述がある。

You are both looking at the same mountains and trees and animals, but the picture for that person is not the same as the one you are seeing. (p. 17)

この記述には、とても重要な指摘が含まれている。このことは、我々は、他者とこの世界を共有している所与の事実を暗黙の前提とし、一見すると誰もが同じ世界を見ている、または、同じ世界が見えているように思っているが、実は、一人ひとりによって見ている、または見えている世界は異なることを意味している。<sup>2</sup>

Egbert and Sanden (2013) は、一人ひとりによって世界の見方・見え方が異なる立場を支持し、研究対象のメカニズムを説明可能にする知識 (knowledge) には、Truth と a truth (or truths) があるとしている (p. 19)。この指摘は大変興味深い。

Truth とは、個人の見解の相違を許容しない真理、法則、または事実の存在を指す。一方、a truth (or truths) は、個々人の見解の相違を許容し、また、個々人の見解の相違があることによってはじめて存立し得るものといえる。住 (2014a) では、「世界をめぐる 2 つの立場」(p. 224) で同様の指摘をしている。ここで注意すべき点は、a truth (or truths) の立場を支持することが、同時に何でもありの相対主義につながることではないということである。a truth (or truths) の立場を支持しながらも、観察対象に科学的に接近し、読み手と世界の見方・見え方を共有するためには必要なルールが存在する。Egbert and Sanden (2013) は、まさにこの点について共通理解を整備することで答えようとしている。

ここで Egbert and Sanden (2013) の内容から離れ、1 つの疑問について考えてみたい。それは、なぜ a truth (or truths) という立場が原理的に可能なのかという疑問である。この疑問への回答は、質的研究がなぜ原理的に可能なのか、質的研究がなぜ量的研究に代わって選択される場合があるのかという疑問にも関わる。Truth と a truth (or truths) との立場の違いを唯物論とか、唯名論といった哲学的な用語を使って説明することは可能であろう。

しかし、認識論の立場の違いを哲学的な用語を根拠に説明することに、著者は常々疑問を感じていた。この回答では、「違うから違うんです」という同語反復にしか聞こえない。本稿では、Egbert and Sanden (2013) が指摘する *a truth (or truths)* という立場の原理的成立可能性について、自由な議論を歓迎するメソ研の雰囲気を頼りに、また、今後の議論に継続させるためにも著者の見解を不十分ながら整理しておく。

*Truth* と *a truth (or truths)* の世界観に接近するために、まず、ユクスキャル (2005) を紹介したい。ユクスキャル (Jakob von Uexküll 1864–1944) は、ドイツ人の動物行動学者で、1930 年代に「環世界」(Umwelt) という概念を提唱した。この概念によれば、すべての生物は、ありのままの客体的な環境ではなく、知覚世界（感じとれる世界 Merkwelt）と作用世界（働きかけられる世界 Wirkwelt）が織りなす環世界を生きている (p. 7)。ユクスキャルは、さまざまな小動物の丁寧な行動観察と実験からこのことを実証的に明らかにした。ユクスキャルによれば、単純な動物には単純な環世界が、複雑な動物にはそれに見合った豊かな構造の環世界が対応している (p. 20)。

ユクスキャル (2005) の翻訳者の一人であり、同じく動物行動学者でもあった日高 (2007) は、ユクスキャルの視点を拡張させ、環世界の概念を人間の認識に適用することを試みた。<sup>3</sup> 日高は、人間の認識について述べる第 9 章の前に、モンシロチョウの環世界を引き合いに、第 8 章を印象的な記述で締めくくっている。

世界を構築し、その世界の中で生きていくということは、そのような知覚的な枠のもとに構築される環世界、その中で生き、その環世界を見、それに対応しながら動くということであって、それがすなわち生きているということである。そして彼らは、何万年、何十万年もそうやって生きてきた。人間はまた全然別の環世界をつくって、その中でずっと生きてきた。環境というものは、そのような非常にたくさんの世界が重なりあつたものだということになる。それぞれの動物主体は、自分たちの世界を構築しないでは生きていくないのである。(p. 137)

この環世界の概念は、動物や有機物に限って応用可能な概念ではない。環境における人間の行為を人工的に再現しようとするロボット研究やセンサー研究に、近年になって積極的に応用されている。谷口 (2010) は、その著書『コミュニケーションするロボットは創れるか：記号創発システムへの構成論的アプローチ』の中で、佐々木 (1994) のアフォーダンスの定義—「環境が動物に提供する「価値」のことである。」(佐々木, 1994, p. 60) —に触れ、「環境」という言葉を、「物理的環境という意味ではなく、自らの感覚運動器としての身体を通して構築された環世界としての環境」(谷口, 2010, p. 97) と、より

正確に定義している。さらに谷口 (2010) は、我々が見ている、または、我々にとって見えている世界に環世界の概念を適応し、以下のように述べている。<sup>4</sup>

私たちの見ている世界は「世界そのもの」ではないことは、自律ロボット研究の上でも非常に重要な指摘である。さまざまな動物が自らのセンサ・モータ系を通してしか世界を認識できず、その範囲内で自らの環世界を構築するのと同じく、自律ロボットも限られたセンサ・モータ系の上に構築される環世界の中で生きていかねばならない。私たち人間が見ているものは客観的な世界ではなく、私たちの身体の諸条件の上で構築された環世界に住んでいる。(p. 63)

社会脳を研究する藤井 (2009) は 2 匹のサルを使い、エサ取り課題の実験を行った。実験では 2 匹の座る位置をさまざまに変化させたり、1 匹だけに道具を与えたりするなどして、机の上に置いたエサに対しての距離や意味づけを変化させる刺激を加えた。刺激によるデータは、頭頂葉の神経細胞の計測と、モーションキャプチャデータとビデオ形式で保存された。実験の結果、興味深いことに、座る位置や道具利用の有無によって、2 匹の利害関係や空間認識に変化が生じることが明らかになった。この結果を受け、藤井 (2009) は、「個体ごとの主観的な社会環境認知の仕方によって、世界の意味が変わる」(p. 121) という考察を加えている。そして、脳内の情報処理がきわめて主観的であることを根拠に、この世界の多様性について以下のように言及している。

いや、世界はヒトだけではなく、生き物の数と同じだけあるでしょう。  
たとえば、森の中に住んで、生き物の血を吸って生きているヒルは、木の  
上でじっと獲物が通りかかるのを待ちます。獲物を待っているときのヒル  
の世界は、単純に獲物がいるか、いないかの情報だけを気にしていればよ  
いのです。そんな世界もあるのです。

それと同じように、みなさんの脳内の世界認知と、僕の感じている世界  
は全く違います。みなさんは、きっと僕の頭の中を見たら、細かいことを  
あまりにも何も気にしていないことに驚くのではないかと思います。

(p. 204)

これまでの議論から、我々を取り巻く環境は、我々の周囲に客観的に外在するものではなく、知覚世界（感じられる世界）と作用世界（働きかけられる世界）で織りなされた環世界であることが分かった。ここで 1 つ強調しなくてはいけない重要な点がある。それは、我々人間にとって、環世界から得られる情報は、動物やロボットが受ける単なる刺激

ではない、という点である。我々人間にとって、環世界から得られる情報は、常に意味と価値を持っている。そして、環世界から得られる情報に意味と価値を付与し、我々の思考や行為を可能にするのが言葉である。<sup>5</sup>

我々は言葉を使って常に考えている。逆に言葉を使わず思考をめぐらすことはできない。例えば、「きれいだな」、「お腹が減った」とか。言葉を使わずに考えることはできない。このことは我々の思考や行為が常に言葉によって規定されていることを裏づけている。同時に、我々が客体的な世界があるがまま認識しているのではなく、我々が言葉の行き渡る範囲・程度でしか世界を認識することができないことを物語っている（村上、1979、「言葉の公共性」）。<sup>6</sup>

また、我々は「りんご」、「えんぴつ」などのように、単に指示対象物を意味するだけのものとして言葉を使ってはいない。考えを述べたり、意志を伝えたり、目前の事象に言葉を使って積極的に「意味づけ」を行い、環世界を更新している（住、2014a, p. 245）。この環世界における言葉による「意味づけ行為」（参照：meaning-making, 秋田, 2007, p. 9）にこそ、他者と連続した、または、他者とは不連続な a truth (or truths) を生みだす原理があると考えている。そして、局所的であり、母集団（定数）を前提とした一般化は望めない限定的な環世界の内での事象ではあるが、その事象を理解する知識（knowledge）を獲得しメカニズムを明らかにすることが、関連する他の事象や高次の事象を理解するために有益である場合、量的研究に代わり質的研究の有意性が發揮されると考える。<sup>7</sup>

### 2.3 Paradigm

第 3 章では、研究デザインや研究手法の選択につながるパラダイムについて書かれている。paradigm は、第 2 章の epistemology の上位概念にあたる。Egbert and Sanden (2013) は、第 1 章の conceptual framework を world view に例え、第 2 章の epistemology を the individual lens に例え、第 3 章の paradigm を how we think that Truth (or truths) can be uncovered (if they can) (p. 33) としている。この paradigm は、図 1 では幹 (Trunk) の部分にあたる。

本書では、上記のパラダイムの説明に続けて、複数のパラダイムを紹介している。研究の手法を選択する際には、その研究手法がどのようなパラダイムに根ざしているのかを理解する必要があると考える。また、そのパラダイムの原理的成立可能性についても、第 2 章同様に各研究者の責任において理解をする必要があると感じる。学会などでパラダイムの異なる研究者同士の不毛な議論や、パラダイムの違いを自覚することなく発せられる質問を見聞きすることがある。これは「共約不可能性」（または通約不可能性、incommensurability）（クーン、1980）と呼ばれるもので、こうした事態を避けるためにも研究者が採用するパラダイムについては、その原理的成立可能性も含めて、研究者自らの言葉で説明できるように準備しておくことが、特に質的研究の場合には必要であると考える。

## 2.4 Theory, Theoretical Framework, and Methodology and Method

第 4 章では、理論 (theory) について書かれている。theory は、第 3 章の paradigm の上位概念にあたる。theory は、以下のように定義され、図 1 では枝 (Branches) の部分にあたる。

We define theory, for the purposes of research, as a reasonable, systematic, investigable, modifiable explanation of certain facts or phenomena that may help to predict an outcome. (p. 47)

第 5 章では、理論枠組み（理論の事象への適応）(theoretical framework) について書かれている。theoretical framework は、第 4 章の theory の上位概念にあたり、theory を研究対象に合わせてより具体化したものといえる。本書には、研究課題を理論枠組みに沿って点検ができる便利な図が掲載されている (p. 64, Figure 5.1)。Theoretical framework は、以下のように本文では定義され、図 1 では小枝 (Twigs) の部分にあたる。

... a theoretical framework can be defined as an **integration of the theoretical concepts that apply to the problem under investigation** [emphasis in original].  
(p. 60)

第 6 章では、研究手法とデータ収集・分析 (methodology and method) について書かれている。methodology and method は、以下のように定義され、図 1 では葉 (Leaves) の部分にあたる。

We define methodology, then, as a **reasonable plan for gathering and analyzing information that responds to a line of research inquiry**. Methods can be defined as the **specific procedures that accomplish the task of gathering and analyzing the data in a research study** [emphasis in original] (p. 75)

### 3. Mertens (2014)

Mertens (2014) については、Egbert and Sanden (2013) の内容と関連する第 1 章と第 8 章をまとめた。また、Mertens (2014) で触れられている質的研究に関する 5 つの評価指標についても紹介する。

### 3.1 Chapter 1: An Introduction to Research

第 4 版となった Mertens (2014) には、質的研究のセクションが加えられた。これは大きな変化である。本書の前書きの部分でその心境を著者は以下のように振り返っている。

As I began conducting research studies myself in the messier world of people and educational and psychological phenomena, I found that a piece of the puzzle was missing. I felt compelled to study the principles of qualitative approaches to research to get a more complete understanding of the phenomena that I was researching.

(p. xvii)

そして、質的研究に関するセクションを本書に追加したことを踏まえ、Egbert and Sanden (2013) の内容とも関連して、第 1 章では以下のように述べている。

In the spirit of full disclosure of values held by researchers, it is my position as author of this text that a researcher's philosophical orientation has implications for every decision made in the research process, including the choice of method. (p. 7)

第 1 章では、主要なパラダイムの変遷と、各パラダイムの特徴（研究対象となる社会的背景、リサーチ・クエスチョン、メソッド、研究デザイン、対象者、結果、考察、結論など）が、サンプルを例示しながらまとめてある。こうした情報からも、研究者の関心から、対象の選定、方法論から結論に至るまでが、一連の作業であることがよく分かる。修士課程の学生などには参考になるのではないか。

### 3.2 Chapter 8: Qualitative Methods

本書では、質的研究について以下のようにまとめられている。質的研究の特徴が分かりやすくまとめられている。

Qualitative research is a situated activity that locates the observer in the world. It consists of a set of interpretive, material practices that make the world visible. These practices transform the world. They turn the world into a series of representations, including field notes, interviews, conversations, photographs, recordings, and memos to the self. ... This means that qualitative researchers study things in their natural settings, attempting to make sense of or to interpret phenomena in terms of the meanings people bring to them. (p. 236)

本書では、主要な質的研究として以下の 5 つをあげ、各特徴をまとめている (p. 242)。インタビューの方法や注意点、調査者の役割など、これまでの質的研究を紹介する文献では具体的に触れられることのなかった情報についても本書は網羅している。

1. Ethnographic research
2. Case study
3. Phenomenological research
4. Grounded theory
5. Participatory action research

質的研究の「質」を保証し、研究コミュニティーに貢献するために (“to engage meaningfully in the debates in the research community” p. xviii), 質的研究が気をつけるべき点についても書かれている。住 (2014a, p. 252, 「質的研究に求められる要件」) も合わせて参考にして頂きたい。

Quality indicators for qualitative research are dependent on the approach and purpose of the study. Standard for evidence and quality in qualitative inquiries requires careful documentation of how the research was conducted and the associated data analysis and interpretation processes, as well as the thinking processes of the researcher. (p. 267)

本書では、上記の点を踏まえ、質的研究の質を検証する基準を以下のように列記している。以下の基準は、質的研究にあるべき基準というよりも、質的研究の質を高め、研究コミュニティーに貢献し得る質的研究のためのガイドラインとして参照することが望まれる。詳細については原著を参照して頂きたいが、こうした基準を理解する際に重要な点は、質的研究においては、こうした基準を満たすことだけが重要なのではなく、紙面に記述されている事象の再現、つまり、「現象からのコトバの引き出し方」(西條, 2008, p. 148) を読者と共有できるようにするということである。そのためには、データと分析プロセスを開示・明示し、常に点検と確認が可能な状態を紙面または付録等を活用して整えることが必要である (住, 2014a)。

1. Credibility
2. Transferability
3. Dependability
4. Confirmability

## 5. Transformative

### 4. GTA and MAXQDA

#### 4.1 Grounded Theory Approach

GTA の詳細に関しては、住（2014b）を詳細にして頂きたい。GTA は、以下、4 点の特徴にまとめることができる。

1. データに根ざして (grounded)
2. 概念をつくり
3. 概念同士の関係性を見つけて
4. 理論（説明様式）を生成する

GTA の分析作業の中心を占めるのがテキスト・データのコーディング作業である。このコーディングの作業を経て、複数の中心概念（コア・カテゴリー）を抽出し、「概念図」と「ストーリーライン」からなる「理論（説明様式）」を提示するのが GTA の大きな流れである。

GTA の種類によって取り扱いが異なるが、オープン・コーディング (open coding), 軸足コーディング (axial coding), 選択的コーディング (selective coding) などがある。しかし、それぞれのコーディングのプロセスと方法に厳密に従う必要はない。実際の作業では、オープン・コーディング、軸足コーディング、そして選択的コーディングが同時に行われることがある。重要な点は、コーディングの結果、明らかにしたいことを十二分に説明可能な中心概念を抽出し、その作業プロセスが点検・確認可能な形で保存および提示されていることである。GTA を実際のデータに適用し、コーディングをする際の注意点を、*MAXQDA* を使った質的研究の手法を国内で広めた佐藤（2006）と、ストラウスとコービンの GTA の流れを汲み、さらに社会構成主義を組み入れ GTA の発展に努めるシャーマズ（2008）から抜粋する。

もっとも、グランデッド・セオリー・アプローチの発想を実際の定性データ分析に適用していく際には、何点か注意を要するポイントがある。

まず第一に注意を要するのは、この方法論の本家本元である 2 人の著者、すなわちグレイザーとストラウスたち自身のあいだで、深刻な見解の対立があるという点である。…これに加えて、さまざまな領域の研究者たちがこの方法論にもとづいておこなったとする実証研究には、実際にはグランデッド・セオリー・アプローチに関する独自の解釈にもとづいておこなわれているものも少なくない、という点にも注意が必要である。

…グランデッド・セオリー・アプローチの発想を実際の調査に適用していく場合には、同アプローチのエッセンスを大づかみにとらえた上で、まず実際のデータを分析してみることの方が重要である。言葉をかえて言えば、グランデッド・セオリー・アプローチの解説書にある手続きや技法に関する独自の言葉使いを、絶対に守らなければならない厳格な規則あるいは「お作法」のようなものとして考えるべきではないのである。むしろ、同アプローチの基本的な発想を状況にあわせて柔軟に適用していくことの方が、はるかに重要であると思われる。(佐藤, 2006, pp. 183–184)

私は、グランデッド・セオリーを、処方箋や出来合いのものではなく、一連の指針と実践であると捉えています。…この手法が、方法論的ルールでも、レシピでも、要件でもない、柔軟なガイドラインであることを強調します。(シャーマズ, 2008, p.13)

GTA を使ったとされる論文に目をとおしても、実際にどのようにコーディングを行ったのかが分からぬ場合は多い。また、抽出されたコードを見ても、なぜそのコードが抽出されたのかが分からぬ場合も多い。こうした問題を解決するために、ここでは 2 つのコーディングの手法と、論文にする際に抽出されたコードを提示する方法について述べたい。

2 つのコーディング手法とは、言語データを 1 行ごとにコード化する手法 (line-by-line coding) と、一度コード化されたデータを使って、さらに高次にコード化を行う手法 (focused coding) である。

(1) 初期の行ごとのコード化 (line-by-line coding) —これは、データを 1 行ごとに念入りに検討することや、自分の考えを概念的に説明することを促す戦略—と、(2) 焦点化のためのコード化 (focused coding) —これは、大量のデータを、分離、分類、そして統合することを可能にする—です。(シャーマズ, 2008, p.16)

ただし、先行研究によってすでに抽出されたコードがあつたり、既存の理論枠組みによって収集された言語データを分析したりする場合には、ボトムアップではなく、トップダウンでコーディングを行う場合もある。

既存の理論的枠組みに対するそのような注意深い配慮がある限りは、先にあげた<1 行ごとのコーディング → 選択的コーディング>という順番を厳格

に守る必要がない場合も出てくる。つまり場合によっては、既存の理論の枠組みに従ってある程度トップダウン的に…ツリー構造形式の分析モデルを最初に仮説的な枠組みとして作っておいて、実際のデータとつき合わせながら修正していく、という分析のやり方が、有効なこともありますのである。

(佐藤, 2006, p. 189)

各種のコーディングを経て抽出されたコードを限られた紙面で提示し、コア・カテゴリーの生成に至るコーディングのプロセスを点検・確認可能にするために有効なのが、コード・マトリクスである。コード・マトリクスは、調査者の理解を深めると共に、読者と理解を共有するツールになる。コード・マトリクスの詳細については、佐藤（2008, 第 5 章）を参照にして頂きたい。

表 1 は、コード・マトリクスの例を提示したものである。もちろんコード・マトリクスの形式はこれに限るものではない。分析対象やデータの種類などを加味し、分析結果を提示するのに有効な形式が選択されるべきである。実際の論文では、小田・石田（2009）や Penz and Duggleby (2011) を本稿執筆の際に参考にした。

表 1

コード・マトリクスの例

	言語データ	コード 1	コード 2	コード 3	カテゴリー
事例 1	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX XXXXXXX	AAA	EEE	LLL	YYY
事例 2	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX XXXXXXX	BBB	FFF		
事例 3	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX XXXXXXX	CCC	JJJ	MMM	YYY
事例 4	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX XXXXXXX	DDD	KKK		

## 4.2 MAXQDA

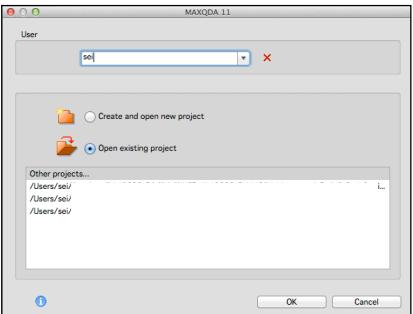
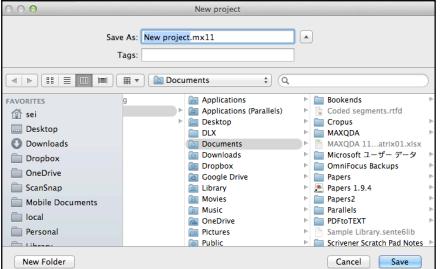
収集された大量の言語データを分析するためのソフトを QDA (qualitative data analysis) ソフトウェアと呼ぶ (Lewins & Silver, 2007)。QDA ソフトウェアを使うことによって、効率的に大量の言語データを分析できるだけではなく、分析結果の可視化など、紙を使った分析では難しかった結果の提示も可能になった。

本稿では、2014 年 2 月に Mac 版が発売された *MAXQDA 11* (<http://www.maxqda.com>) について簡単な概説を行う。*MAXQDA 11* は、直感的なインターフェースをもち、短時間で使い方を理解することができる。また、佐藤（2006, 2008）など、*MAXQDA* を使った日本語で読める書籍もある。

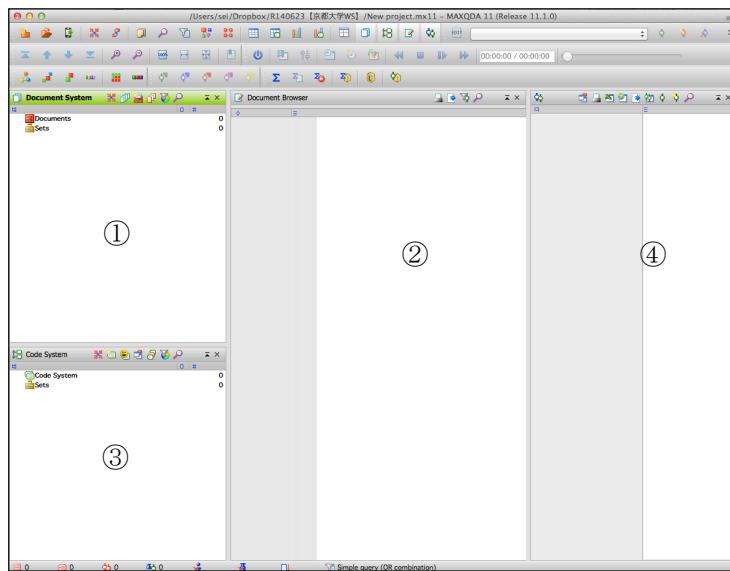
*MAXQDA 11* に限らず、QDA ソフトウェアを使った主な分析手順は、以下のとおりである。

1. QDA ソフトへの文書の取り込み
2. コードの作成とコーディング
3. 分析モデルの作成と再編集
4. それぞれのコードに対応するセグメントの検索・表示・印刷

以下、主要な作業画面ごとに分析手順を分割して、*MAXQDA 11* の説明を行う。

1. プロジェクトファイルの作成と保存	
	<p><i>MAXQDA 11</i> のアイコンをクリックすると、新規にプロジェクトを作成する【Create and Open New Project】と、既存のプロジェクトを開く【Open Existing Project】を選択する画面が表示される。</p> <p>新規の場合は、【Create and Open New Project】にチェックを入れ、【OK】をクリックする</p>
	<p>次にプロジェクトを保存する場所を指定する。</p> <p>一度プロジェクトの保存先を指定すると、作業中は自動的に作業プロセスを保存する仕様になっている。</p>

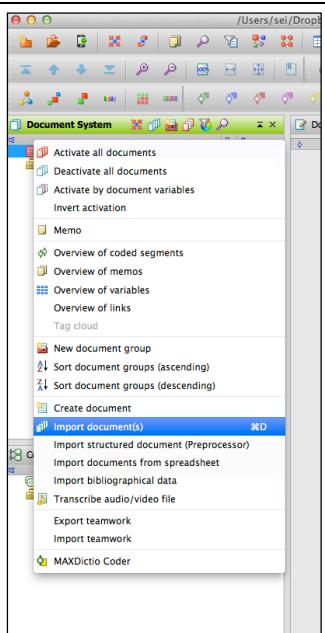
## 2. MAXQDA 11 の作業インターフェース



上記は、テキストを取り込む前の初期画面である。

- ① ドキュメント・システム：読み込んだ文書のタイトルを一覧表示することができる
- ② テキスト・プラウザ：読み込んだ文書の内容を確認することができる
- ③ コード・システム：コードの作成、入れ替え、移動などを行うことができる
- ④ 検索済みセグメント表示欄：文書データとコードとの関連づけの結果を一覧表示することができる

## 3. 文書の読み込み

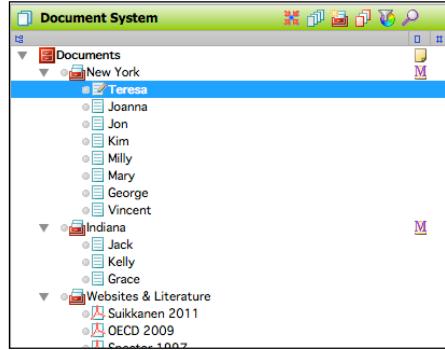
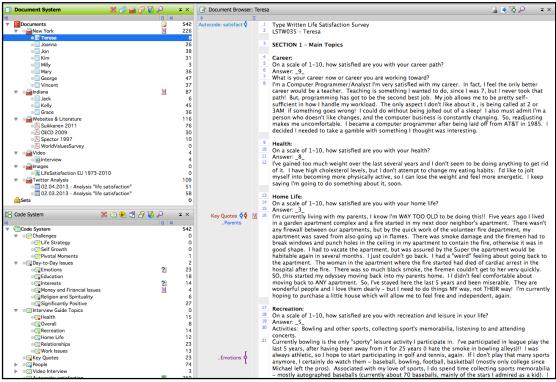
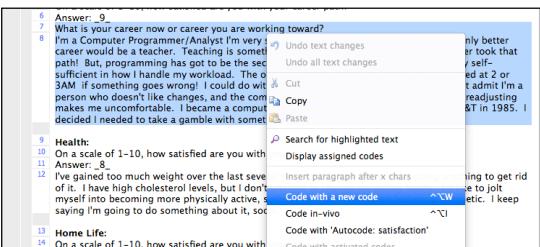
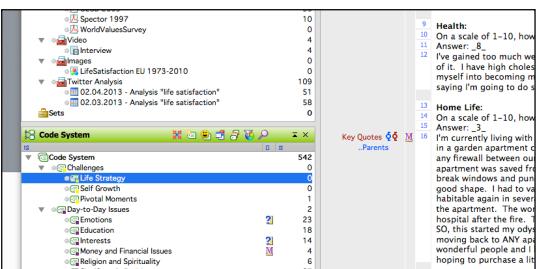


文書の読み込みはキャビネットの形をした、【Texts】のところ右クリックして【Import document(s)】をクリックすることによって行う。

MAXQDA 11 は、テキスト・データのみならず、PDF、音声、動画、画像など、多様なデータを取り扱うことができる。

読み込まれたテキストは、グループごとにキャビネットに分けて管理することも可能である。

#### 4. 文書の閲覧とコーディング

	<p>テキストの展開は、読み込まれたテキストのアイコンをダブルクリックすることによって行う。</p> <p>展開されたテキストは以下のように表示される。</p>
	<p>テキストの展開は、読み込まれたテキストのアイコンをダブルクリックすることによって行う。</p> <p>展開されたテキストは以下のように表示される。</p>
	<p>コードの作成とテキストのコーディングには、2 つの方法がある。</p> <p>1 つは、コードの割りつけを行うテキストの範囲を反転させ、その上で右クリックをして、【Code with a New Code】を選択した後にコード名を入力する方法である。</p> <p>もう 1 つは、あらかじめコード・エリアにコードを作成しておき、コードを割りつけるテキスト範囲を反転させ、コードをドラッグ &amp; ドロップする方法である。</p>
	

*MAXQDA 11* は、階層構造でコードを整理することができる。また、コードの順番を柔軟に入れ替えることができる。言語データの分析では、コード名の変更や、コードの割りつけ先の変更が繁茂に生じる。*MAXQDA 11* の柔軟性は大きなメリットである。

コードを作成する際には、各コードにメモをつけることを推奨する。<sup>8</sup> 特に初期のデータ処理の段階で各コードにメモをつけておくことは、後からの煩雑な作業を軽減する。このメモは、GTA では最後の理論（説明様式）を生成する際にも有用である。作成したメモは MEMO SYSTEM で一元的に管理される。

## 5. コーディングしたセグメントの一覧表示と比較検証

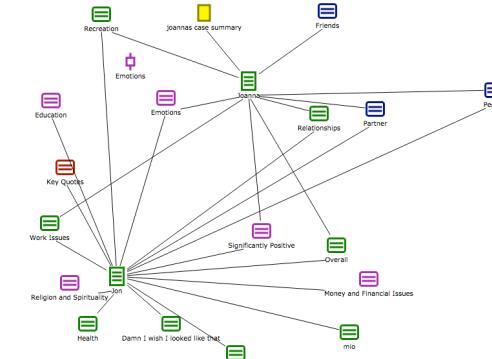
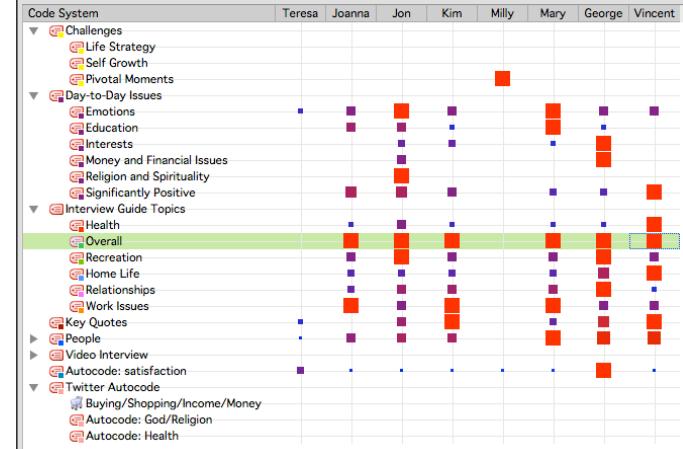
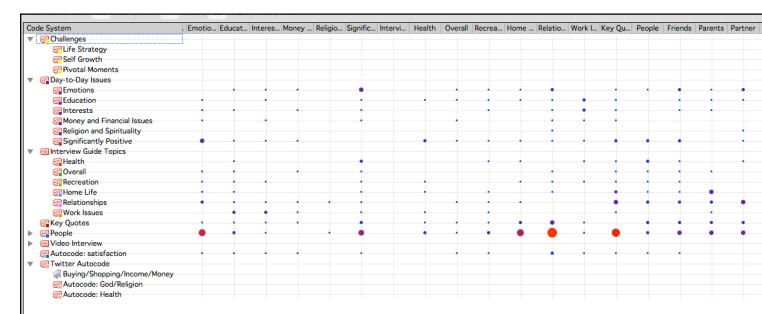
The screenshot displays three panels of the MAXQDA 11 interface:

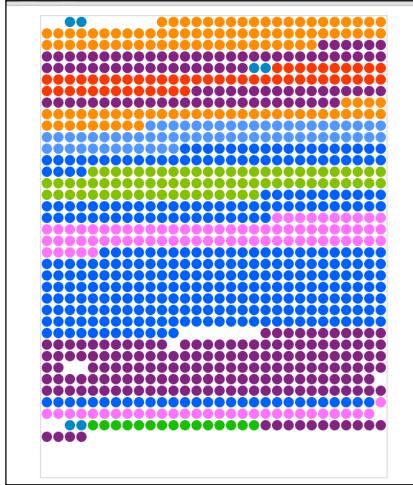
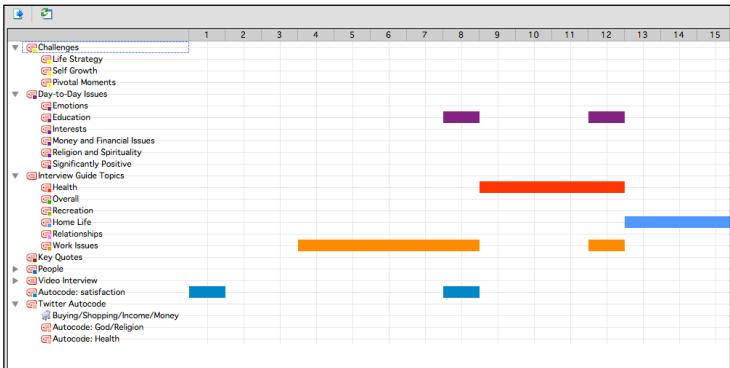
- Document System:** Shows a hierarchical tree of documents and code systems. Under "Documents", there are sections for New York, Indiana, and My. Under "Code System", there are sections for Challenges, Self Growth, Day-to-Day Issues, Interview Guide Topics, and People.
- Document Browser:** Shows a list of retrieved segments. The first segment is "Answer - 2" from "Joanna" at "c 4 - 8". Other segments include "Family - 09", "Romance - 00", and various entries under "SECTION 2 - WORD TO STORY PROMPTS..." such as "FALLURE" and "SUCCESS".
- Retrieved Segments:** Shows a detailed view of the "Answer - 2" segment. It includes the original text: "your career path? Answer: your work What is your career now or career you are working toward? My career now is college. I am graduating this weekend from my Community Health Undergraduate program at Hofstra University. I am continuing my undergraduate studies at CW Post in the fall and get a MS in nursing. Getting my RD is my major career choice. My satisfaction level on my career is only a 7 because I am not looking forward to going back to undergrad college but it is the only way I can achieve a license." Below this are three comparison versions of the same segment, each with a different code assignment (e.g., "c 8 - 8", "c 9 - 12", "c 12 - 12") and a "satisfaction" code.

*MAXQDA 11* では、コーディングしたテキストをコードごとに元データから抽出して、一覧表示・出力することができる。この作業は、抽象的なコードの概念と現実的な元データとの間の往復運動を可能にし、分析モデルを洗練していくために大変重要である。方法はとても簡単で、特定のテキストまたはコードの上で右クリックをして【Active】を選択するだけである。この方法で以下 3 つのパターンでの一覧表示が可能である。

1. 「特定のいくつかのコード」に関して、「すべての文書」から抜きだして一覧する
2. 「すべてのコード」に関して、「特定のいくつかの文書」から抜きだして一覧する
3. 「すべてのコード」に関して、「すべての文書」から抜きだして一覧する  
(参照、佐藤, 2006, pp. 90–91)

*MAXQDA 11* は、コーディングした結果を可視的に表現する機能もあり、コード・マトリクスと組み合わせることによって、より説得力のある分析結果の提示ができる。

6. コードの色分けと視覚的分析																																																																																																																																																																																																																																																				
<b>MaxMap</b> コア・カタゴリーの全体像と位置関係を表示する。																																																																																																																																																																																																																																																				
<b>Code Matrix Browser</b> 各コードと各データの関係性を表示。割りつけられたコードの量によって、四角が大きくなる。	 <table border="1"> <thead> <tr> <th>Code System</th> <th>Teresa</th> <th>Joanna</th> <th>Jon</th> <th>Kim</th> <th>Milly</th> <th>Mary</th> <th>George</th> <th>Vincent</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Challenges</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Life Strategy</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Self Growth</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Pivotal Moments</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Day-to-Day Issues</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Emotions</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> </tr> <tr> <td>Education</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Interests</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Money and Financial Issues</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Religion and Spirituality</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Significantly Positive</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Interview Guide Topics</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Health</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Overall</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> <td>■</td> </tr> <tr> <td>Recreation</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Home Life</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Relationships</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Work Issues</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Key Quotes</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>People</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Video Interview</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Autocode: satisfaction</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Twitter Autocode</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Buying/Shopping/Income/Money</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Autocode: God/Religion</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>Autocode: Health</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	Code System	Teresa	Joanna	Jon	Kim	Milly	Mary	George	Vincent	Challenges									Life Strategy									Self Growth									Pivotal Moments									Day-to-Day Issues									Emotions	■	■	■	■	■	■	■	■	Education									Interests									Money and Financial Issues									Religion and Spirituality									Significantly Positive									Interview Guide Topics									Health									Overall	■	■	■	■	■	■	■	■	Recreation									Home Life									Relationships									Work Issues									Key Quotes									People									Video Interview									Autocode: satisfaction									Twitter Autocode									Buying/Shopping/Income/Money									Autocode: God/Religion									Autocode: Health								
Code System	Teresa	Joanna	Jon	Kim	Milly	Mary	George	Vincent																																																																																																																																																																																																																																												
Challenges																																																																																																																																																																																																																																																				
Life Strategy																																																																																																																																																																																																																																																				
Self Growth																																																																																																																																																																																																																																																				
Pivotal Moments																																																																																																																																																																																																																																																				
Day-to-Day Issues																																																																																																																																																																																																																																																				
Emotions	■	■	■	■	■	■	■	■																																																																																																																																																																																																																																												
Education																																																																																																																																																																																																																																																				
Interests																																																																																																																																																																																																																																																				
Money and Financial Issues																																																																																																																																																																																																																																																				
Religion and Spirituality																																																																																																																																																																																																																																																				
Significantly Positive																																																																																																																																																																																																																																																				
Interview Guide Topics																																																																																																																																																																																																																																																				
Health																																																																																																																																																																																																																																																				
Overall	■	■	■	■	■	■	■	■																																																																																																																																																																																																																																												
Recreation																																																																																																																																																																																																																																																				
Home Life																																																																																																																																																																																																																																																				
Relationships																																																																																																																																																																																																																																																				
Work Issues																																																																																																																																																																																																																																																				
Key Quotes																																																																																																																																																																																																																																																				
People																																																																																																																																																																																																																																																				
Video Interview																																																																																																																																																																																																																																																				
Autocode: satisfaction																																																																																																																																																																																																																																																				
Twitter Autocode																																																																																																																																																																																																																																																				
Buying/Shopping/Income/Money																																																																																																																																																																																																																																																				
Autocode: God/Religion																																																																																																																																																																																																																																																				
Autocode: Health																																																																																																																																																																																																																																																				
<b>Code Relation Browser</b> コードとコードの重複関係を表示することによって、コードの組み合わせを直感的に把握することができる。	 <table border="1"> <thead> <tr> <th>Code System</th> <th>Emotio... Educat... Interes... Money ... Religio... Signific... Intervi... Health ... Overall Recrea... Home ... Relatio... Work L... Key Qu... People Friends Parents Partner S...</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Challenges</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Life Strategy</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Self Growth</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Pivotal Moments</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Day-to-Day Issues</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Emotions</td> <td>●</td> </tr> <tr> <td>Education</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Interests</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Money and Financial Issues</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Religion and Spirituality</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Significantly Positive</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Interview Guide Topics</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Health</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Overall</td> <td>●</td> </tr> <tr> <td>Recreation</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Home Life</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Relationships</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Work Issues</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Key Quotes</td> <td></td> </tr> <tr> <td>People</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Video Interview</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Autocode: satisfaction</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Twitter Autocode</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Buying/Shopping/Income/Money</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Autocode: God/Religion</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Autocode: Health</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	Code System	Emotio... Educat... Interes... Money ... Religio... Signific... Intervi... Health ... Overall Recrea... Home ... Relatio... Work L... Key Qu... People Friends Parents Partner S...	Challenges		Life Strategy		Self Growth		Pivotal Moments		Day-to-Day Issues		Emotions	●	Education		Interests		Money and Financial Issues		Religion and Spirituality		Significantly Positive		Interview Guide Topics		Health		Overall	●	Recreation		Home Life		Relationships		Work Issues		Key Quotes		People		Video Interview		Autocode: satisfaction		Twitter Autocode		Buying/Shopping/Income/Money		Autocode: God/Religion		Autocode: Health																																																																																																																																																																																														
Code System	Emotio... Educat... Interes... Money ... Religio... Signific... Intervi... Health ... Overall Recrea... Home ... Relatio... Work L... Key Qu... People Friends Parents Partner S...																																																																																																																																																																																																																																																			
Challenges																																																																																																																																																																																																																																																				
Life Strategy																																																																																																																																																																																																																																																				
Self Growth																																																																																																																																																																																																																																																				
Pivotal Moments																																																																																																																																																																																																																																																				
Day-to-Day Issues																																																																																																																																																																																																																																																				
Emotions	●																																																																																																																																																																																																																																																			
Education																																																																																																																																																																																																																																																				
Interests																																																																																																																																																																																																																																																				
Money and Financial Issues																																																																																																																																																																																																																																																				
Religion and Spirituality																																																																																																																																																																																																																																																				
Significantly Positive																																																																																																																																																																																																																																																				
Interview Guide Topics																																																																																																																																																																																																																																																				
Health																																																																																																																																																																																																																																																				
Overall	●																																																																																																																																																																																																																																																			
Recreation																																																																																																																																																																																																																																																				
Home Life																																																																																																																																																																																																																																																				
Relationships																																																																																																																																																																																																																																																				
Work Issues																																																																																																																																																																																																																																																				
Key Quotes																																																																																																																																																																																																																																																				
People																																																																																																																																																																																																																																																				
Video Interview																																																																																																																																																																																																																																																				
Autocode: satisfaction																																																																																																																																																																																																																																																				
Twitter Autocode																																																																																																																																																																																																																																																				
Buying/Shopping/Income/Money																																																																																																																																																																																																																																																				
Autocode: God/Religion																																																																																																																																																																																																																																																				
Autocode: Health																																																																																																																																																																																																																																																				

Document Comparison Chart	<p>データの各行毎のコードの変化を可視化することができる。</p> 
Document Portrait	<p>各データに占める各コードの位置と量を把握することができる。</p> 
Codeline	<p>各コードが利用されている位置を表示することができる。</p> 

*MAXQDA 11* は、通常のソフトとは異なり、プロジェクトに加えられた変更内容はその都度直ちにファイルに反映される。プログラムの終了時にデータを上書き保存する必要はない。アプリケーションを閉じるだけで保存終了することができる。しかし、この仕様は便利な反面、直前の作業状況にファイルを戻すことができないなど不都合な面もある。プロジェクトに大きな改変を加える直前には定期的にバックアップファイルを作成し、別途保存しておくことを勧める。方法は、ツールバーのメニューから【Backup Project】を選択するだけで可能である。ファイル名には、日付や時間などを入れておくと良い。

## 5. まとめ

本稿では、Egbert, J., & Sanden, S. (2013). *Foundations of education research*. の内容と、Mertens, D. M. (2014). *Research and evaluation in education and psychology* (4th ed). の中で質的研究について触れられている箇所についてまとめた。Egbert and Sanden (2013) では、特に第 2 章の *epistemology* の理解について著者の見解を加えた。これはこれまでのメソ研での議論を一度紙面で整理し、継続的に更新していくためである。Mertens (2014) については、質的研究に関する箇所を抜粋してまとめた。本書は、単に方法論の紹介に留まらず、具体例を添えて各手法を紹介する良書である。本稿の後半では、GTA と *MAXQDA 11* について概説をした。QDA ソフトウェアに興味を持った読者は、無料トライアル版もダウンロードできるので試して頂きたい。

大きな木が大地に根を張り、葉の生い茂った枝を空に広げるよう、研究に関わる conceptual framework から method の選択までは、一貫した営為であることを本稿で確認した。こうした研究に関わる外層を理解することは、とくに初学者にとっては重要であろう。しかし、こうした外層を理解するだけでは、事象のメカニズムを理解し、事象を紙面で再現するために必要な言葉を身につけることはできない。膨大な言語データを集め、分析は行ったけれども、質的研究の結論が、常識程度や報告書程度のものになってはいけない。こうした事態を避けるために、佐藤 (2006) は、現場感覚や実践経験を踏まえた調査研究の必要性を強く主張している。それは、現場経験や実践経験を欠いて調査を行ってはいけないという意味ではなく、問題意識や課題意識が固まらないまま「つまみ食い」的にデータを収集し、安易な「似たもの」を集めたコーディングによる調査研究をしてはいけないという意味である。佐藤 (2006) は、この点に関して次のように述べている。「KJ 法あるいはグランデッド・セオリー・アプローチが理論構築という点で真の意味で威力を發揮するのは、むしろ現場での実戦経験や調査体験を踏まえた上で、それを理論文献や先行研究で言われている内容と丹念につき合わせていく作業がきちんとなされた時であろう」(佐藤, 2006, p. 188)。当事者意識を持って場に関わり、問題意識と課題意識を育て、同時に先行研究を調査し、また、現場に照らし合わせていく。こうした往復を経て、研究対象が織りなす環世界を丹念にそして鋭く描きだす解像度の高い言葉を身につけること。こ

うした地道な作業が質的研究の質を高めるためには欠かせない。

## 注

1. ここで書かれていることは「関心相関性」(interest-correlativity) とも関連する (西條, 2005, p. 53; 住, 2014a, p. 247)。
2. これは「観察の理論負荷性」(the theory-ladenness of observation) とも呼ばれている (ハンソン, 1986)。よく知られた例では、同一の絵が観察者の視点と意味づけによってアヒルやウサギに見える多義図形がある。
3. 日高 (2007) と関連する事柄を Nørretranders (1999, p.152) は、自然界に存在する 110 万ビットの情報の内、私たちが知覚できるのは 8 から 40 ビットに過ぎないことを根拠に、<私> (Self) という意識の幻想という主張を展開している。
4. 同様の指摘は池上 (2007) でも確認できる。
5. この点に関しては深谷・田中 (1996) も参照にして頂きたい。
6. 言葉は、環世界を構成する作用世界と知覚世界を結ぶインターフェースのような機能を果たしていると考える。蛇足ながら、だからこそ一人ひとりの環世界を広げるために、言葉の教育、外国语教育が必要なのではないかと考える。
7. 質的研究の一般化については、サンデロウスキー (2013, p. 50) が参考になる。
8. 佐藤 (2006) は、メモについて次のように述べている。「これは単に思いついたアイディアについて忘れないように記録に残しておく、という手続きにとどまらない。メモを書く作業は、それに加えてそのアイディアをさらに練り上げていき、最終的に分析モデルや説明図式にまで結びつけていくために不可欠な作業なのである」(p. 178)。

## 参考文献

- 秋田 喜代美 (2007). 「教育・学習研究における質的研究」秋田 喜代美・野智 正博 (監)『はじめての質的研究法 教育・学習編』(pp. 3-20) 東京図書
- シャーマズ, K. (抱井 尚子・末田 清子 [監訳]) (2008). 『グランデッド・セオリーの構築 : 社会構成主義からの挑戦』ナカニシヤ出版
- Egbert, J., & Sanden, S. (2013). *Foundations of education research*. NY: Routledge
- 藤井 直敬 (2009). 『つながる脳』エヌティティ出版.
- 深谷 昌弘・田中 茂範 (1996). 『コトバの<意味づけ論> : 日常言語の生の営み』紀伊國屋書店
- ハンソン, H. R. (村上陽一郎 [訳]) (1986). 『科学的発見のパターン』講談社
- 日高 敏隆 (2007). 『動物と人間の世界認識 : イリュージョンなしに世界は見えない』筑摩書房.
- 池上 高志 (2007). 『動きが生命をつくる : 生命と意識への構成論的アプローチ』. 青土社.
- クーン, T. (中山 茂 [訳]) (1980). 『科学革命の構造』みすず書房
- Lewins, A, & Silver, C. (2007). *Using software in qualitative research: A step-by-step guide*. Los Angeles : Sage Publications.

- Mertens, D. M. (2014). *Research and evaluation in education and psychology* (4th ed). Thousand Oaks, Calif. : Sage Publications.
- 村上 陽一郎 (1979). 『新しい科学論：「事実」は理論をたおせるか』 講談社.
- Nørretranders, T. (1999). *The user illusion: Cutting consciousness down to size*. Penguin Books.
- Northcutt, N., & McCoy, D. (2004). *Interactive qualitative analysis: A systems method for qualitative research*. Thousand Oaks, CA: Sage publications.
- 小田 史・石田 京子 (2009) . 「事例演習を軸とした介護技術演習の効果：フォーカス・グループを用いて（第 2 報）』『創発：大阪健康福祉短期大学紀要』, 8, 103–113.
- Penz, K., & Duggleby, W. (2011). *Harmonizing hope: A grounded theory study of the experience of hope of registered nurses who provide palliative care in community settings*. Palliative and Supportive Care, 9, 281–294.
- 西條 剛央 (2005). 『構造構成主義とは何か：次世代人間科学の原理』 北大路書房.
- 西條 剛央 (2008). 『ライブ講義・質的研究とは何か：SCQRM アドバンス編』 新曜社.
- 佐藤 郁哉 (2006) . 『定性データ分析入門：定性データ分析入門』 新曜社
- 佐藤 郁哉 (2008) . 『質的データ分析法：原理・方法・実践』 新曜社
- サンデロウスキイ, M. (谷津 裕子・江藤 裕之 [訳]) (2013) . 『質的研究をめぐる 10 の キークエスチョン：サンデロウスキイ論文に学ぶ』 医学書院
- 佐々木 正人 (1994). 『アフォーダンス：新しい認知の理論』 岩波書店
- 住 政二郎 (2014a) . 「質的研究入門：基盤概念を知るために」 竹内 理・水本 篤 (編) 『外国语教育研究ハンドブック【改訂版】：研究手法のよりよい理解のために』 松柏社.
- 住 政二郎 (2014b). 「GTA 入門：言語データを質的に分析するには」 竹内 理・水本 篤 (編) 『外国语教育研究ハンドブック【改訂版】：研究手法のよりよい理解のために』 松柏社.
- 高木 亜希子 (2014, March). 「質的研究の世界へようこそ」 LET 関西支部メソドロジー研究部会 2013 年度 第 3 回研究会. 早稲田大学.
- 谷口 忠大 (2010) . 『コミュニケーションするロボットは創れるか：記号創発システムへの構成論的アプローチ』 NTT 出版.
- ユクスキャル, J. (日高 敏隆・羽田 節子 [訳]) (2005) . 『生物から見た世界』 岩波書店.